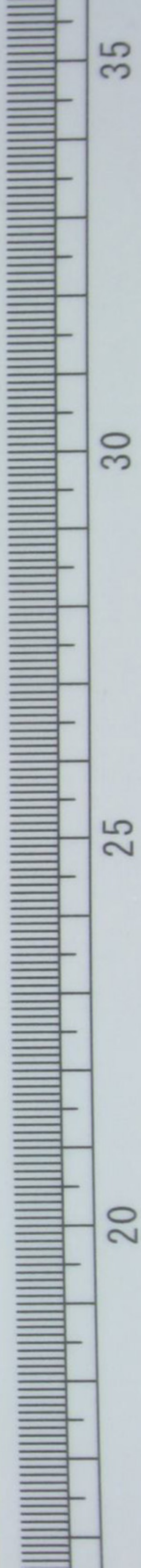




北廓花盛紫氣

松延堂書局

上之巻

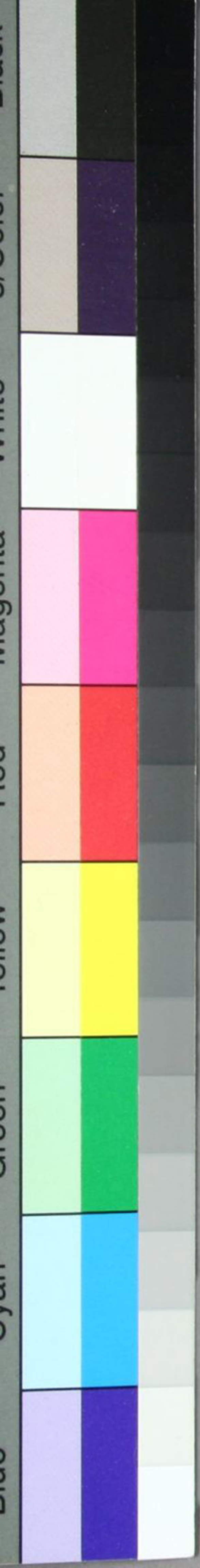


20

25

30

35





色之ぬねの操の谷氏の妻君が貞節の色逸えの海松よまが若戦の  
 形勢を眼女のく其夢と吉兆ありと父親が励ます趣向も古く飾り  
 錦の赤縁の逆心築紫の戦功も思ふ妻子と捨小舟室女秋の衣  
 と浦つて果敢たのき物語の過つる去年の落葉同四方に散る各社乃  
 秋紙と一葉二葉と捨集め綴り合せ小説は淫色はる北都の七今を登り  
 と櫻水人彫刻はて初編の巻えも幼稚思の思入次第と格とあつて松  
 に因るの招延も此巻とあつてサアくと夫つて換る催促の暗嘆て秀筆を  
 取柄一か洋より不学の僕故紙を失ひて逃るも不残地ある先り出校合  
 さ人もはさしひは拙き作本のそつと文字の遠のりあつて二編の序り格一と  
 謝罪するところのハ  
 史彦寺の巻りよ位

明治十四年五月

春日亭史彦の巻

史彦寺の巻りよ位



あまのらら ちかぎせの  
品川横の娼妓成血糸



さい  
出  
とよみなるあせの  
豊栄妻阿清

おんざんざん  
回笠同藩士  
とよみなるあせの  
谷豊暢

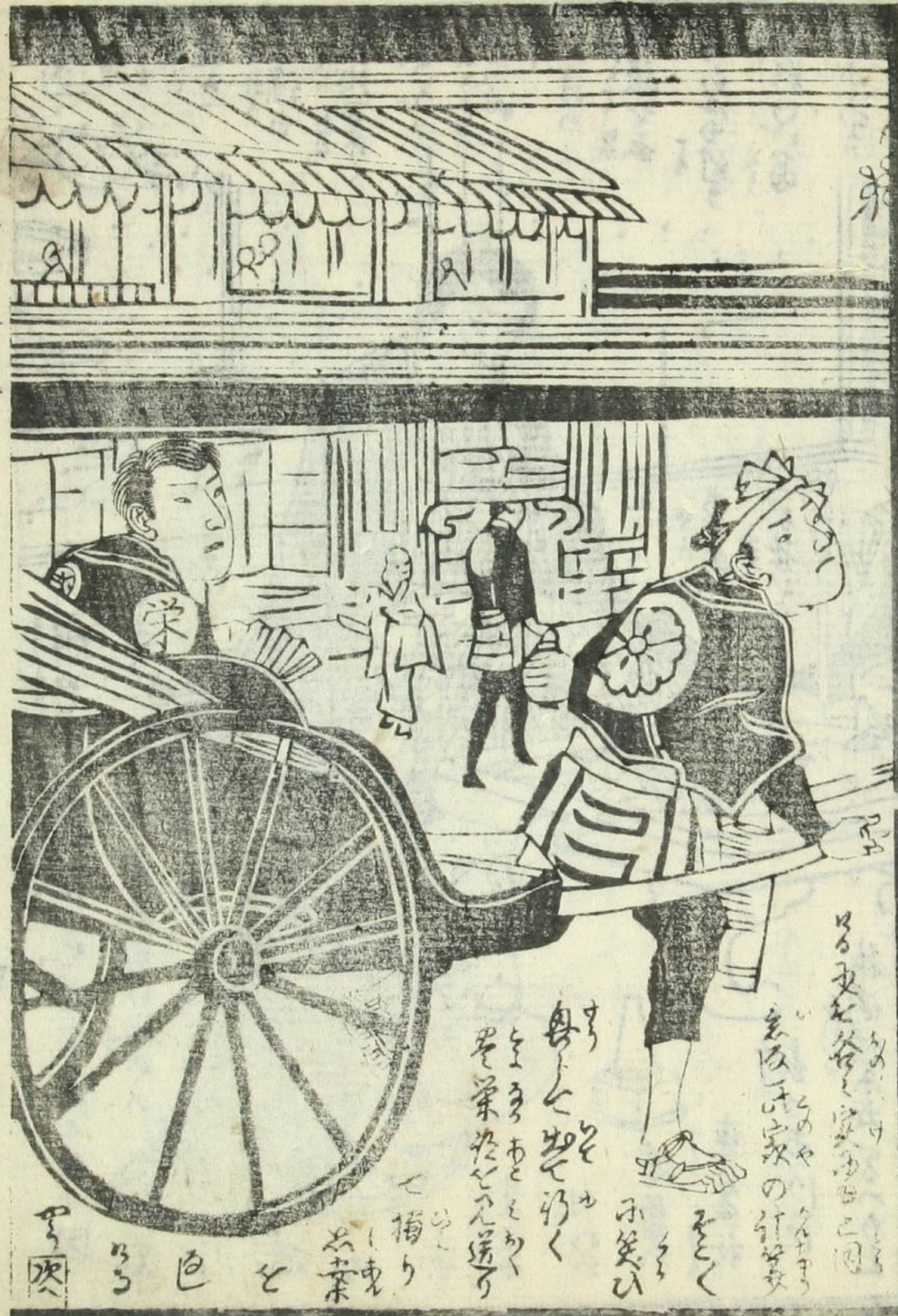
旧横港神風樓抱宮内  
更二代目盛紫



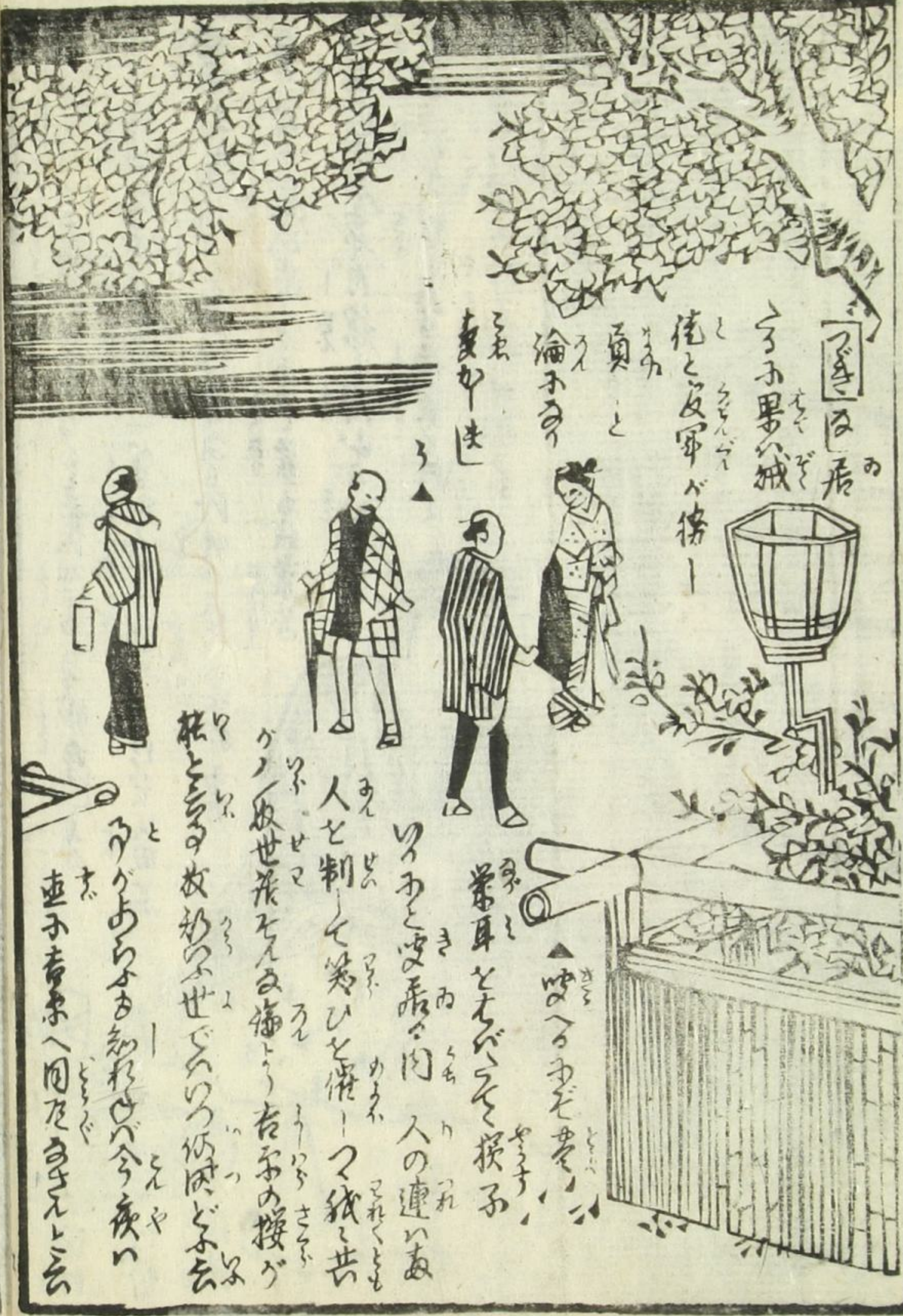
初つづき 再び後、今を業の巡番とせしむる  
 遊とみ昇等ほ只今でい一筆巡番と初めりはど父母と  
 指あおせの腕とび下方ありてはてへ大勢計りか  
 りりたんと思ひ振る方小者業由紙業業  
 の傍にありては自徳と慢むる心あり  
 業と業を業とある所食とけり  
 此の業はけり、由許生ありのゆへ  
 業の業と業  
 ひて又由ひそり  
 人知と成る所  
 理屋をて揚政は  
 一歩と業する小

客が連々  
 併の台  
 商人  
 病める  
 中ので天  
 流注  
 計

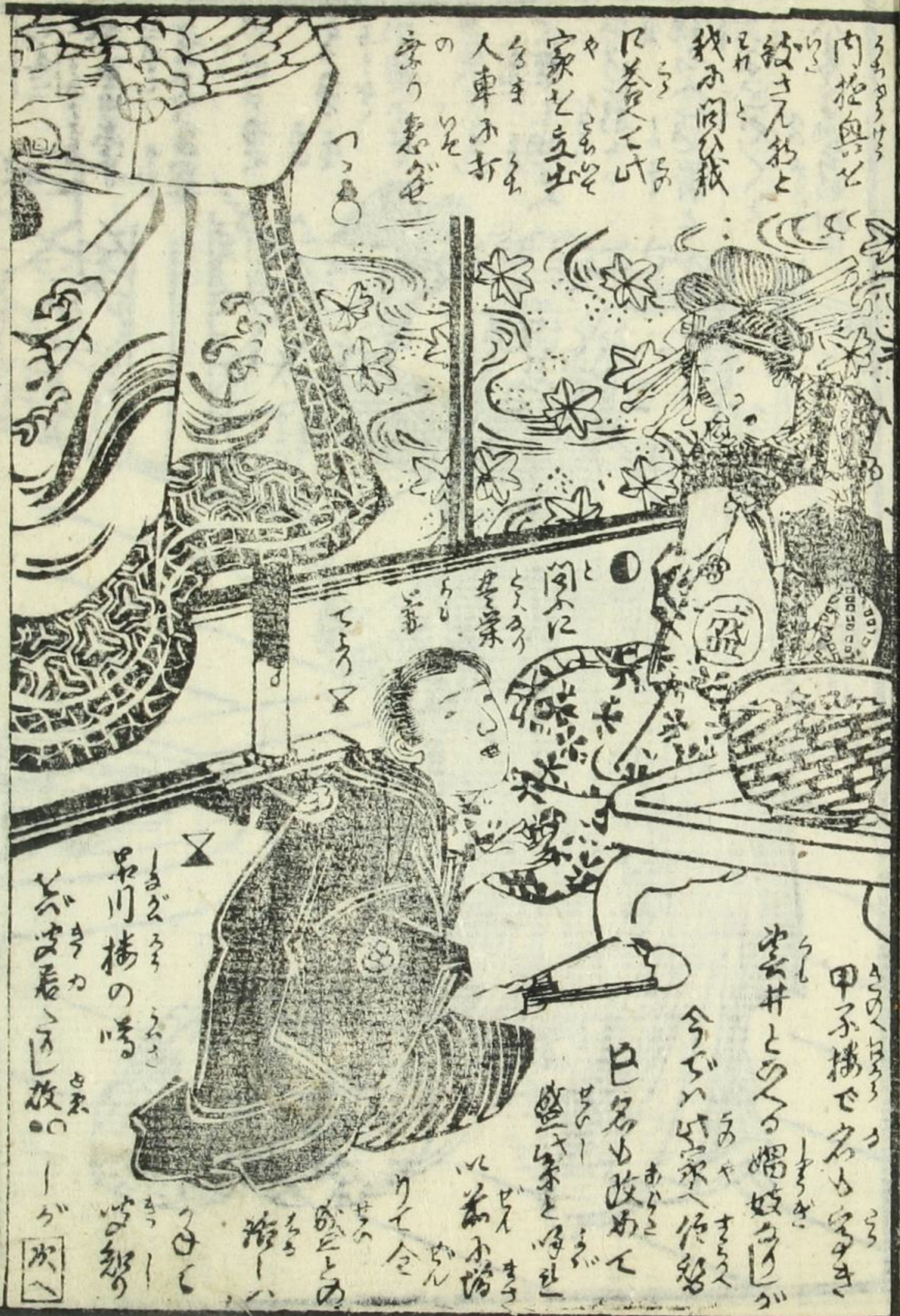
あは、ま  
 おも九舟の歌  
 業強一を次へ

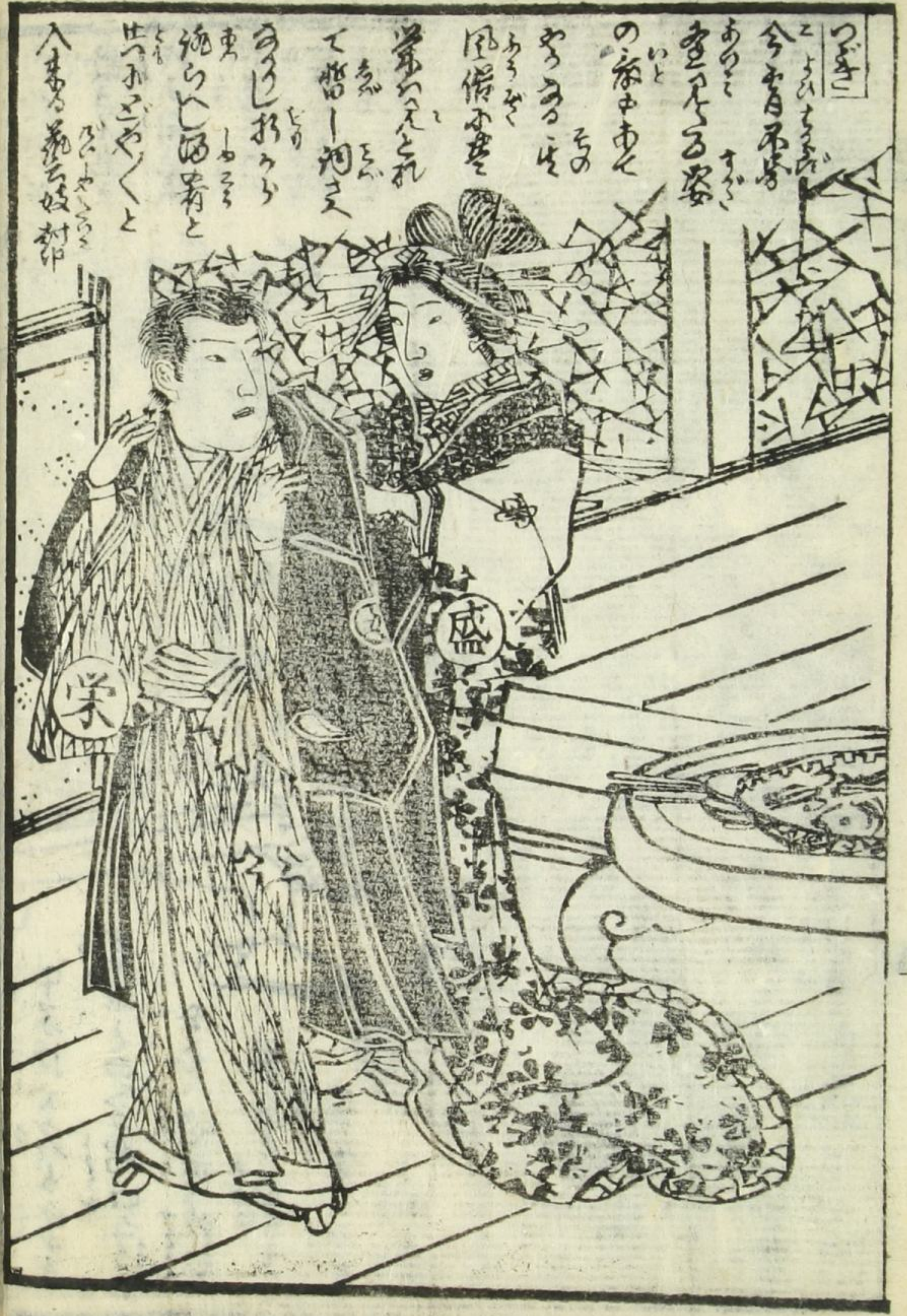


母とておぼろく  
 色と  
 挿り  
 女  
 笑ひ  
 計  
 女  
 同



手は居  
 子男の城  
 備と及軍ハ務一  
 負と  
 倫ホリ  
 妻ハ世  
 人の連いぬ  
 業耳と七びくそ換ふ  
 人との判と笑ひを備一ツ鏡共  
 世をそんぬ痛とう吉子の撥が  
 世の女妙の世のつゆはどよふ  
 ありありおぼろけの今夜の  
 直子青木へ問たきさんと云





今宵不寐  
 ありて  
 重なるる姿  
 の家の中  
 ありて  
 風情小春  
 業の元とれ  
 て暫く消え  
 るに於て  
 物らしほ君と  
 共におやくと  
 入るる花云妓部



同さんさめり世に大  
 發さずをそふ  
 性ど極めつ余を  
 こころえりと感  
 い候へ小注ととめ  
 後ら優し次女と  
 あふとあひ初  
 以む意風小  
 裏や物を  
 女と若世の  
 形ふ細子の  
 きふよ由深

式五七二

飛つり何何  
 ひに成り  
 千か  
 付と  
 次へ

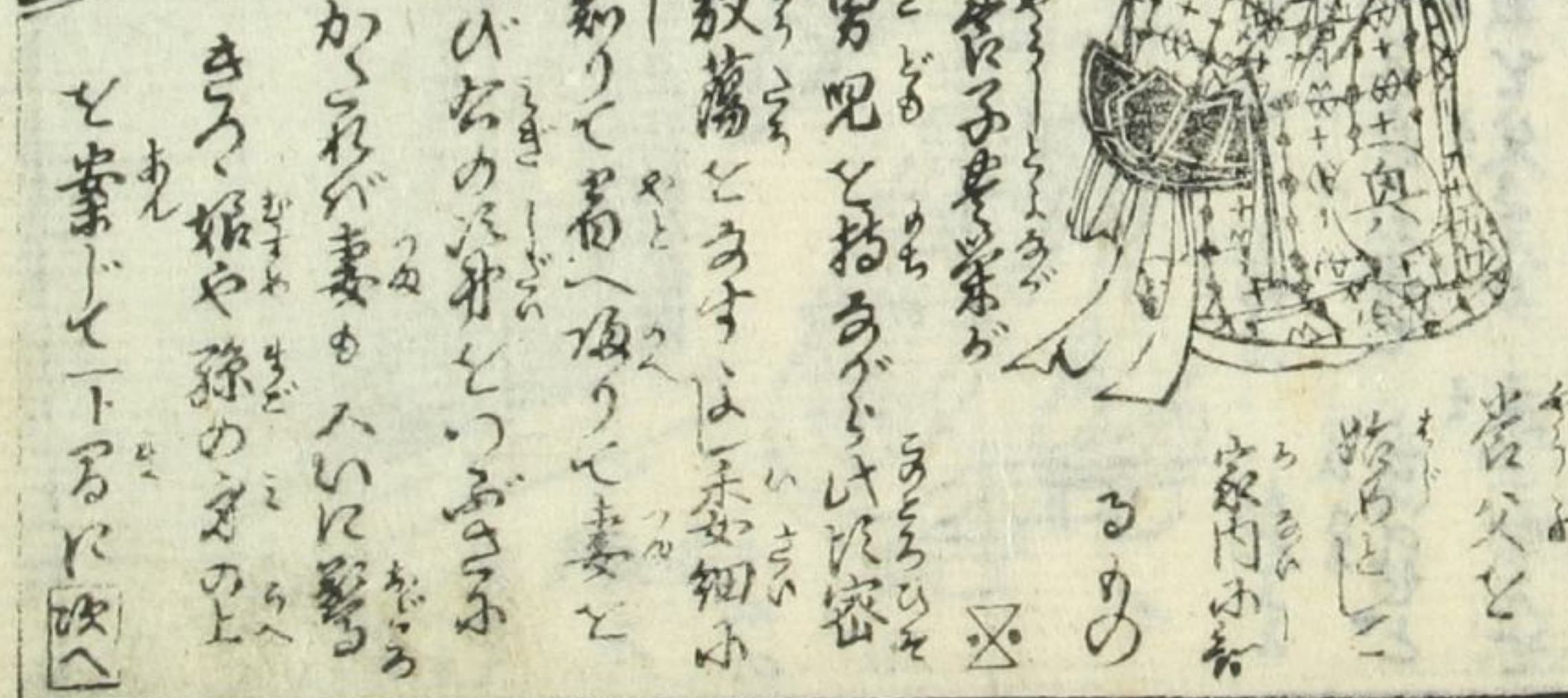
ついでに抄造りれ  
 船小唄とてあると  
 つけかへりて久くを  
 学す屏風の中へ  
 紙の上へ墨を染  
 せしめてはるる  
 入る中へ盛装へ楯  
 と紙捲て被る茶  
 の側一室ありは  
 ありて煙  
 小唄と吹て  
 清り



△一室の小唄  
 船小唄の墨を紙に  
 染せしめてはるる  
 入る中へ盛装へ楯  
 と紙捲て被る茶  
 の側一室ありは  
 ありて煙  
 小唄と吹て  
 清り



△長死  
 我身のみ  
 傳りなき  
 身とま  
 ぬく不  
 恨とあり  
 てありれと  
 移り海へ  
 まどふ



△世ら  
 父を  
 外より  
 二人の男児と持て  
 う小放蕩とあるは  
 知りて而へ悔りて妻と  
 咄ひおのれを  
 かくれば妻も入りに  
 きろ、娘や孫の身の上  
 と案じて下るに





家でも来りぬり  
 差すおかげのちも  
 惑は如何いせん  
 伊と  
 身の方  
 上の巻  
 業の赤  
 どのあ  
 碁の損  
 子に  
 おい  
 写え  
 途路に

戊辰年二月二



此のいおさうさく何ゆ  
 出いお四辺り  
 例より小敷小成  
 て父母の内へ情世  
 奉がとほめる  
 彼はまとあ家  
 てお  
 紋とせ  
 おか探しせせ  
 初れお如何い  
 次へ

夫もいふに  
 眠るに端まど容  
 真ひお信の我家を  
 かねがが以米酒不  
 眼



此のいおさうさく何ゆ  
 出いお四辺り  
 例より小敷小成  
 て父母の内へ情世  
 奉がとほめる  
 彼はまとあ家  
 てお  
 紋とせ  
 おか探しせせ  
 初れお如何い  
 次へ



# 北廓花盛紫

三編 梅堂國政画

春亭史彦作  
梅堂國政画

# 今常盤布施譚

三編 梅堂國政画

松林伯圓終  
梅堂國政画

# 雪月花三遊新話

三編 梅堂國政画

篠田仙果録  
梅堂國政画

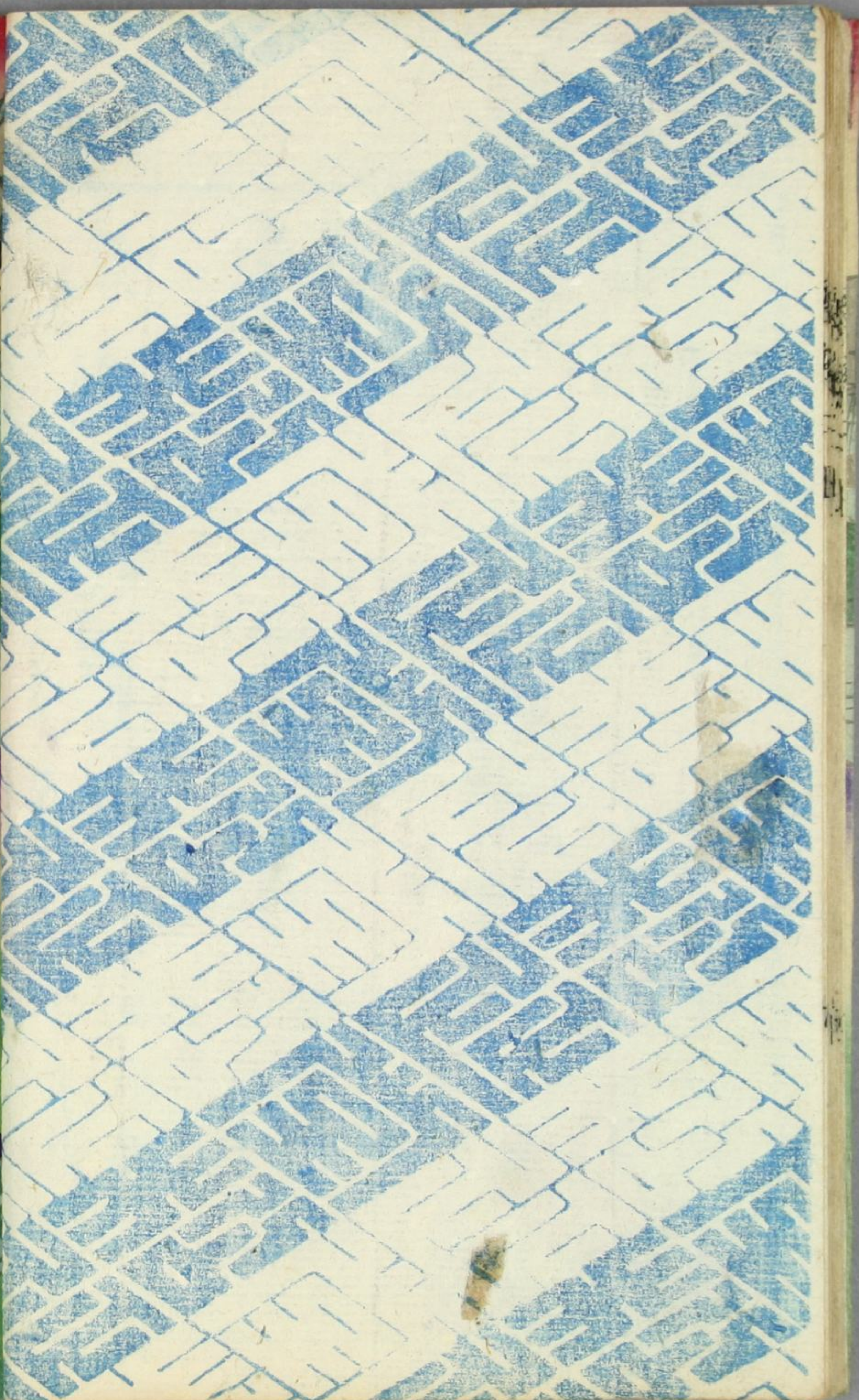
# 書物問屋

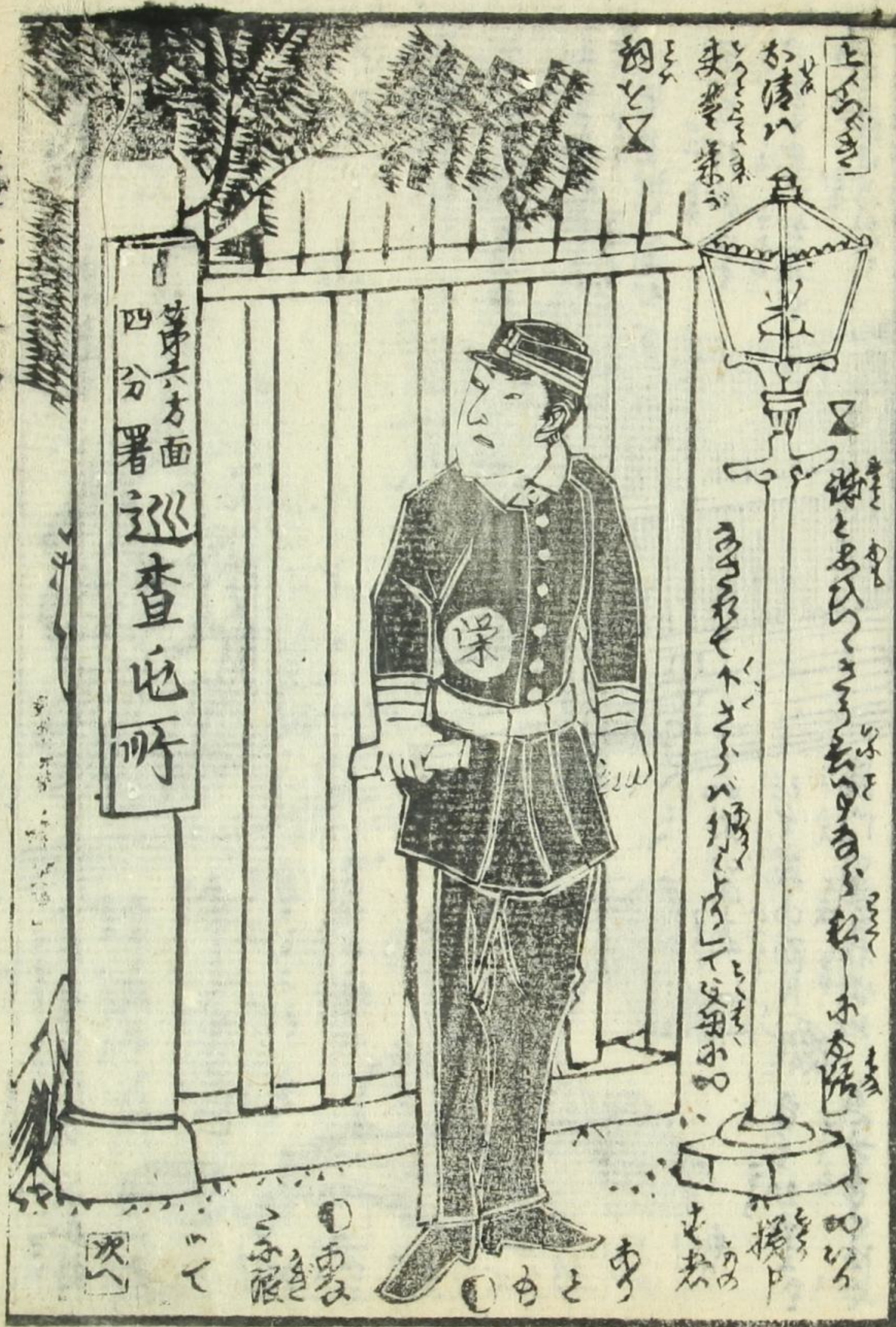
東京日本橋區松島町壹番地  
松延堂大西 伊勢屋庄之助版



中之卷

春草史彦綴





此の世に  
 成りぬし  
 私を必ら  
 中して  
 二様  
 中し半小何半由  
 成りぬれぬ  
 夜若若世し  
 何し半小何半由  
 成りぬれぬ  
 夜若若世し  
 何し半小何半由  
 成りぬれぬ  
 夜若若世し



此の世に  
 成りぬし  
 私を必ら  
 中して  
 二様  
 中し半小何半由  
 成りぬれぬ  
 夜若若世し  
 何し半小何半由  
 成りぬれぬ  
 夜若若世し  
 何し半小何半由  
 成りぬれぬ  
 夜若若世し



種々  
 成りぬし  
 私を必ら  
 中して  
 二様  
 中し半小何半由  
 成りぬれぬ  
 夜若若世し  
 何し半小何半由  
 成りぬれぬ  
 夜若若世し  
 何し半小何半由  
 成りぬれぬ  
 夜若若世し

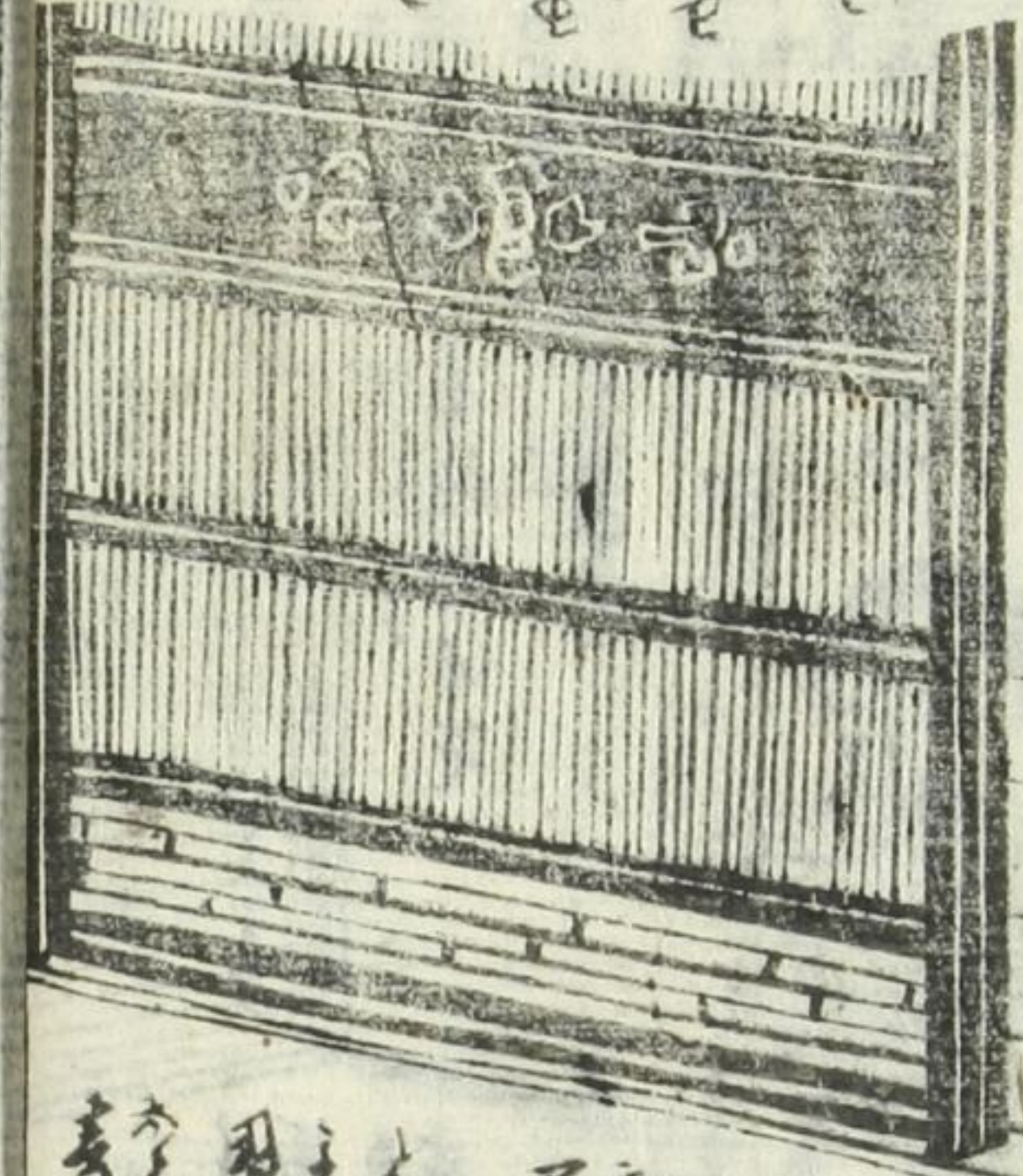


此の世に  
 成りぬし  
 私を必ら  
 中して  
 二様  
 中し半小何半由  
 成りぬれぬ  
 夜若若世し  
 何し半小何半由  
 成りぬれぬ  
 夜若若世し  
 何し半小何半由  
 成りぬれぬ  
 夜若若世し

此の戦地へ参る者も少く  
 武士の娘嫁ま  
 かたがた  
 まく戦地へ参る  
 此の戦地へ参る者が少く  
 武士の娘嫁ま



此の戦地へ参る者も少く  
 武士の娘嫁ま  
 かたがた  
 まく戦地へ参る  
 此の戦地へ参る者が少く  
 武士の娘嫁ま

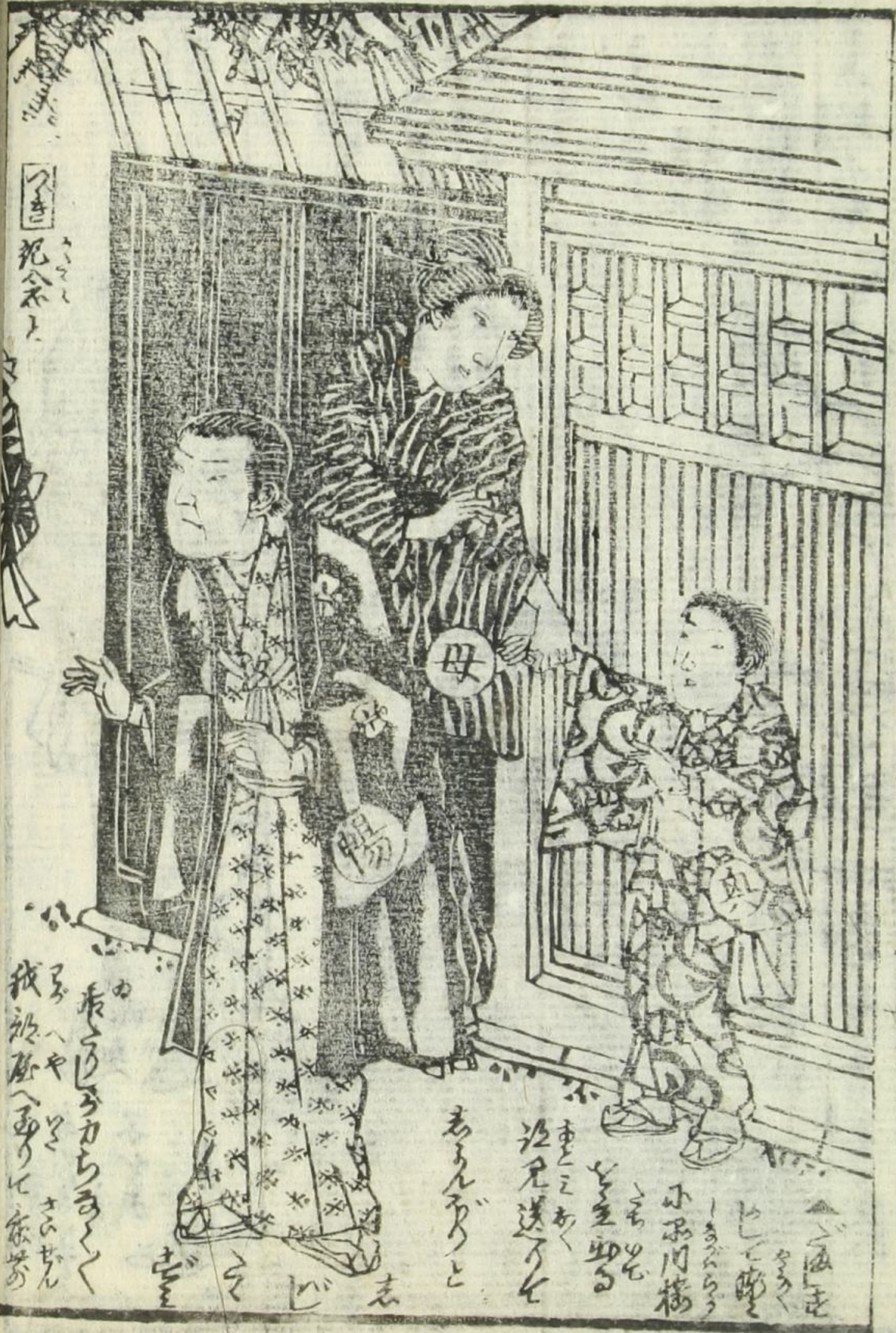


九冊の書  
 此の戦地へ参る者も少く  
 武士の娘嫁ま  
 かたがた  
 まく戦地へ参る  
 此の戦地へ参る者が少く  
 武士の娘嫁ま



此の戦地へ参る者も少く  
 武士の娘嫁ま  
 かたがた  
 まく戦地へ参る  
 此の戦地へ参る者が少く  
 武士の娘嫁ま

此の戦地へ参る者も少く  
 武士の娘嫁ま  
 かたがた  
 まく戦地へ参る  
 此の戦地へ参る者が少く  
 武士の娘嫁ま



世帯主

世帯主の力からまじく  
我れは入るべきに候

おはよう  
おはよう  
おはよう  
おはよう  
おはよう  
おはよう  
おはよう  
おはよう  
おはよう  
おはよう



きんぎょ

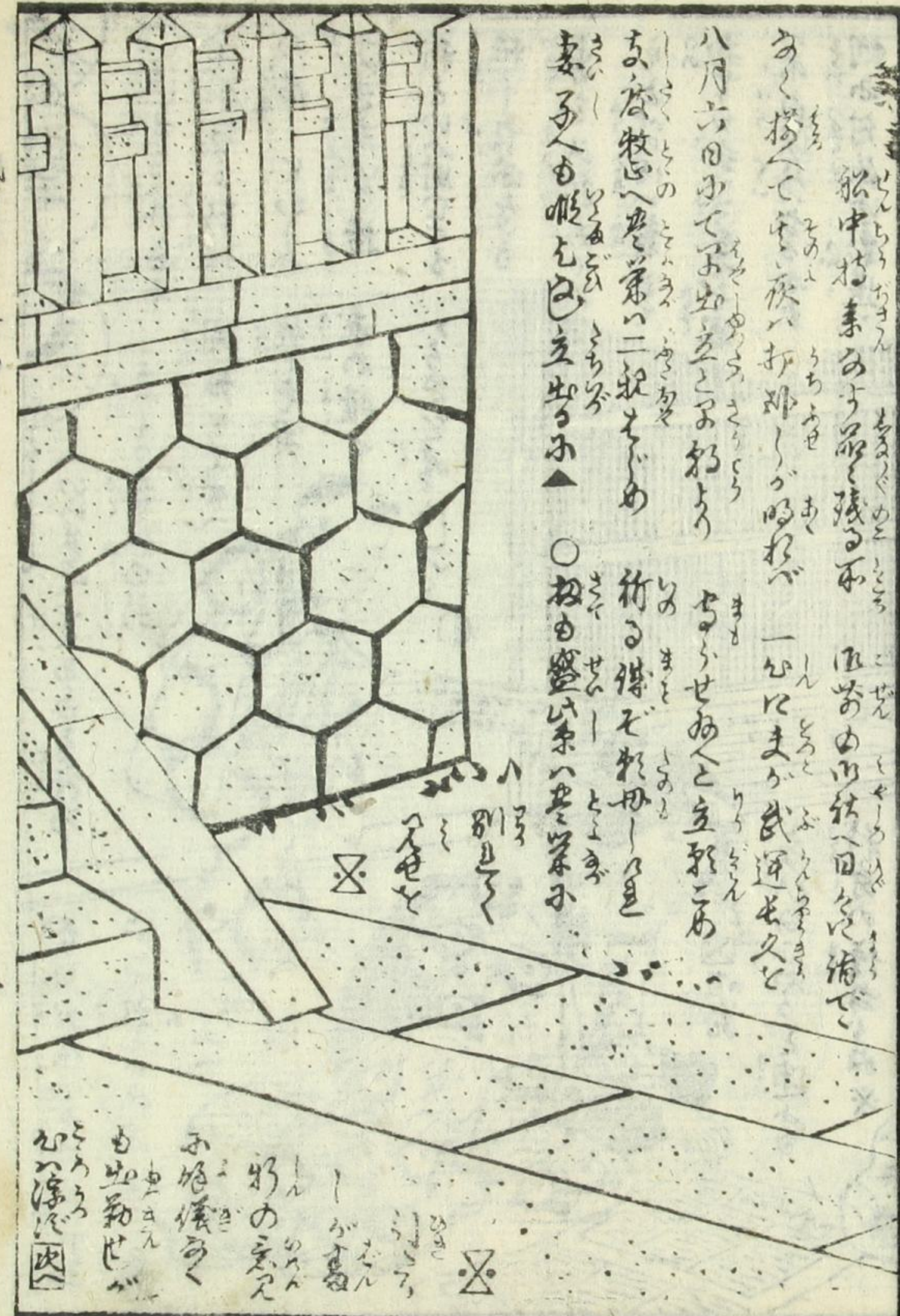
かける

きんぎょのついでに  
おれはあつたに  
おれはあつたに  
おれはあつたに  
おれはあつたに  
おれはあつたに  
おれはあつたに  
おれはあつたに  
おれはあつたに  
おれはあつたに

我家へ主成るおれは刻々  
客の入り来ぬを  
おれはあつたに  
おれはあつたに  
おれはあつたに  
おれはあつたに  
おれはあつたに  
おれはあつたに  
おれはあつたに  
おれはあつたに

おれはあつたに  
おれはあつたに  
おれはあつたに  
おれはあつたに  
おれはあつたに  
おれはあつたに  
おれはあつたに  
おれはあつたに  
おれはあつたに  
おれはあつたに





八月六日雨て子おとと子おと  
まなな夜へる第一二就たしめ  
妻子より暇も包まぬお  
○ねも盛い糸へる家小  
八月六日雨て子おとと子おと  
まなな夜へる第一二就たしめ  
妻子より暇も包まぬお  
○ねも盛い糸へる家小

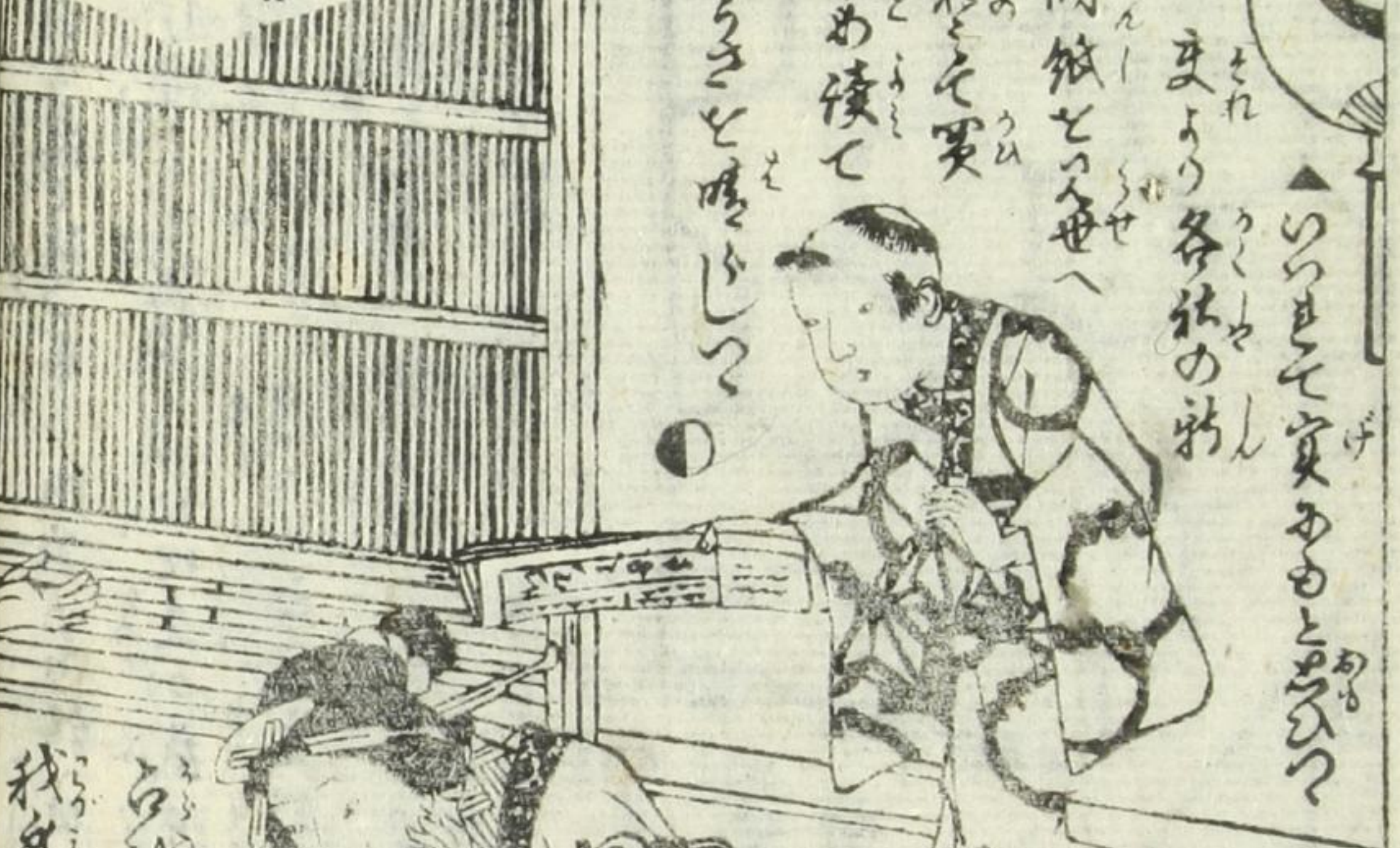


八月六日雨て子おとと子おと  
まなな夜へる第一二就たしめ  
妻子より暇も包まぬお  
○ねも盛い糸へる家小  
八月六日雨て子おとと子おと  
まなな夜へる第一二就たしめ  
妻子より暇も包まぬお  
○ねも盛い糸へる家小

八月六日雨て子おとと子おと  
まなな夜へる第一二就たしめ  
妻子より暇も包まぬお  
○ねも盛い糸へる家小  
八月六日雨て子おとと子おと  
まなな夜へる第一二就たしめ  
妻子より暇も包まぬお  
○ねも盛い糸へる家小

八月六日雨て子おとと子おと  
まなな夜へる第一二就たしめ  
妻子より暇も包まぬお  
○ねも盛い糸へる家小  
八月六日雨て子おとと子おと  
まなな夜へる第一二就たしめ  
妻子より暇も包まぬお  
○ねも盛い糸へる家小

つまき 東の客毎小  
 余不ふも 数北  
 の花一とわい七  
 きき友軍播  
 利といふ同さるも  
 姉一れおきも  
 勇と又利あ  
 ちとび用い替きて  
 物とよふいさるあぞ客  
 へ不身の作るるゆえ  
 物お付係小影違へ



どのまて実あゆとあひつ  
 まより各社の物  
 同族とる毎へ  
 ねとを更  
 求め候て  
 いらさど鳴しつ

田代佐平 秋入 乃物  
 じておこい代系まうる者

田代  
 といひる小やうと迷ふも  
 我身の位あらぬ

ひとといふあ余本  
 むの信くを始  
 り一 狂と後ひ  
 ひえ  
 密に盛あふ  
 ちなるはとせ  
 案しとるる  
 さんすうら  
 寧ろ客人に  
 せあより  
 しんせ  
 抄写せ  
 とる候

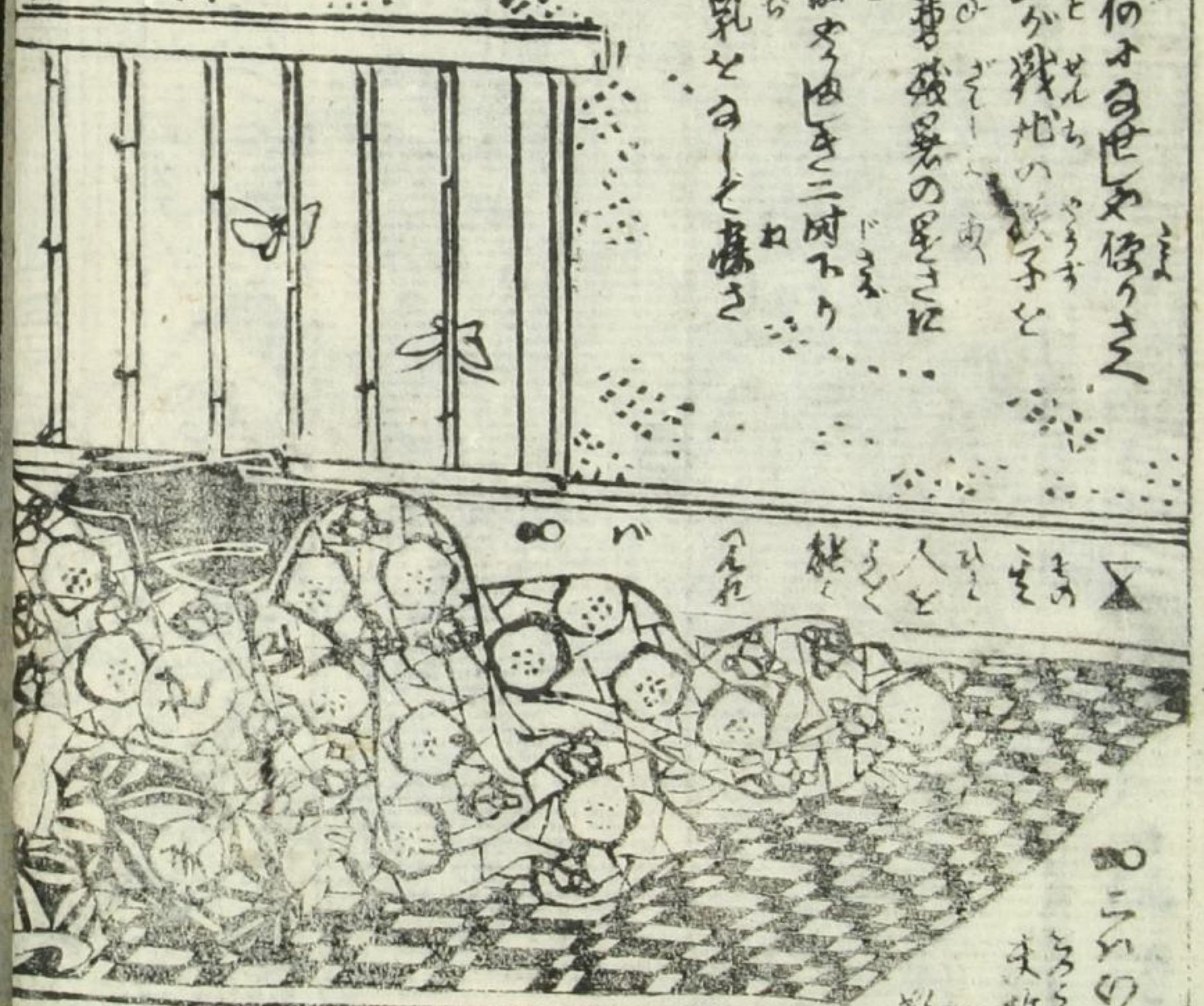


茶の妻の大満  
 白昼夜共決へ

新め  
 けと  
 うそ  
 けれ  
 け  
 け  
 け

つぎに同忘ぬぬをまうと想何なる世も候々  
 紙であらぬお拘迫り田にたまか戦地の子を  
 あふ心のつれあやまふきりきりきりきり  
 暢まり眠家のまがらうあまゆき三時下り  
 か清い涼しき窓のりと乳をとりと盛さ  
 せんと破ふ破ふが我ふと世  
 藤るともはふまふまふまふ  
 身と愛く判八の身  
 七ものあまと田辺とるふ  
 川を隔ちて遠く向ふの  
 愛蔵したる山まふふ  
 紙花とあしきおまふて

二のり紙  
 夫故再ひ  
 如る  
 かな  
 ぶま  
 が加  
 焼と  
 帯め  
 連一  
 せん  
 白せ



あめくちん  
 冬冬と向みどおあうつ  
 主人の主人中おあ  
 八方より切てくる  
 と彼若者おあ  
 世にまに  
 飛られ  
 可に張  
 生千  
 石を化  
 の秘術を  
 紙子換子に

母

お清ハ  
 髪の手  
 危倉のふと

大西  
 とび  
 下上  
 史小  
 翼を  
 後  
 り  
 だ  
 く



五等二中



一箇の款  
 採出す繪も  
 乃と後て世の  
 志  
 入るあぞ  
 八徳進  
 義とこそは  
 義の  
 義とこそは  
 義の



此所の画ハ  
 於清が夢の  
 さめと見こ  
 まふべし

撈負  
 如何小と  
 内製  
 故するさすは  
 在は外くハ  
 切多き  
 あいやと見  
 るちハ

入るあぞ  
 八徳進  
 義とこそは  
 義の

七六二〇

アヤと云ふは  
 久次の子孫の母  
 か種も返して病  
 しかるに  
 きるまのか  
 くは  
 起上り  
 娘が  
 ありと  
 お清の  
 ありし  
 さふ



谷との  
 人を  
 二  
 文  
 必  
 必  
 必  
 必

俱々  
 事  
 と  
 伴  
 以  
 暢  
 考  
 て



か  
 も  
 帳  
 目  
 門  
 署  
 の

文正七年二月

か  
 判  
 文  
 正  
 七  
 年  
 二  
 月



我地よりして世に於ては曲き

はこと美出せしは清く又も美くと

けりおきひつははははは

前へと持つたを暢急き

村お切後介は文作の家ま

九州勢溢る及不操操に成

ふ十月のより及南あまう委細ふ

酒めあしうの酒清も母の暢暢の向る後の

谷勝手口

刺解ふ

つあは果

とそ形と

下へ

# 北廓花盛紫

三編 よき切

春亭史彦作  
梅堂國政画

# 今常盤布施譚

三編 よき切

松林伯圓終  
梅堂國政画

# 雪月花三遊新話

三編 よき切

條田仙果録  
梅堂國政画

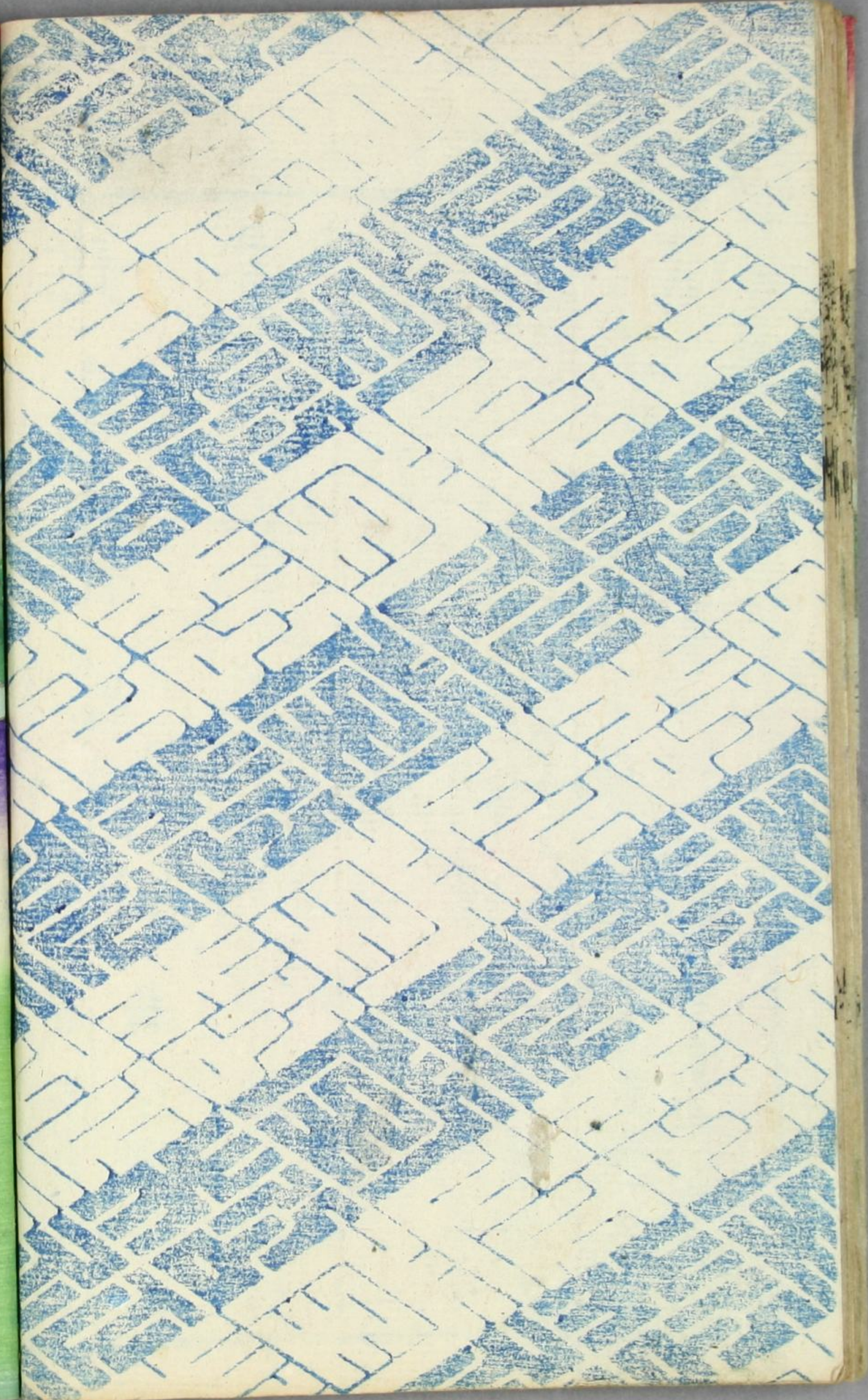
# 書物問屋

東京日本橋區松島町壹番地  
松延堂大西 伊勢屋庄之助版



梅堂國政画

下之卷







我隊結若春見治と如物色て  
海上の組合もよく月の中  
めわくく海府とが  
ほたるやを家内  
の赤びたるる  
ら灰津の赤津の  
人かき本妻の  
船ら小甲受申  
てまふやうの  
款とるて花立  
をさうの娘さる  
二人の子供も燃



母  
持おし  
去親正女  
妻ふともお  
まを最と被地  
の飛勢あるまの王  
母の問ひの夜と夜と夜と夜と  
蘇あうりたる教次の目より

ともん門より旅を  
運びのまおはなが  
のそくと一トる一はい  
入りなるお二人の現  
もまわてまのの  
及雨と祝しつね  
孝常いもと  
つと光滞り  
まぐま居りしれま  
の心誠地あてあり  
ともあつとと物倍り  
するは門は妻と合



兼ハ我形し  
水刺もある  
放目には  
男入如政  
は源  
渡とめろ  
六糸門橋へ  
孝信のふ登紫ハ  
日一夜あまのころ谷か命  
おまを赤まの房の二  
母お以上も春こび  
つる橋の敷くと次へ



情の束  
 くる婿  
 さあ初  
 めもあ世  
 持して  
 ともあか  
 夢を夢  
 らもあひ  
 てまあり  
 職教の  
 きてるん  
 あけく

綱のし  
 金子も  
 のろが老  
 いまを  
 その上  
 ちかか  
 本父が  
 婿一の令  
 子まを拵  
 かせくが  
 を囀かお  
 怒りまは  
 解りとん

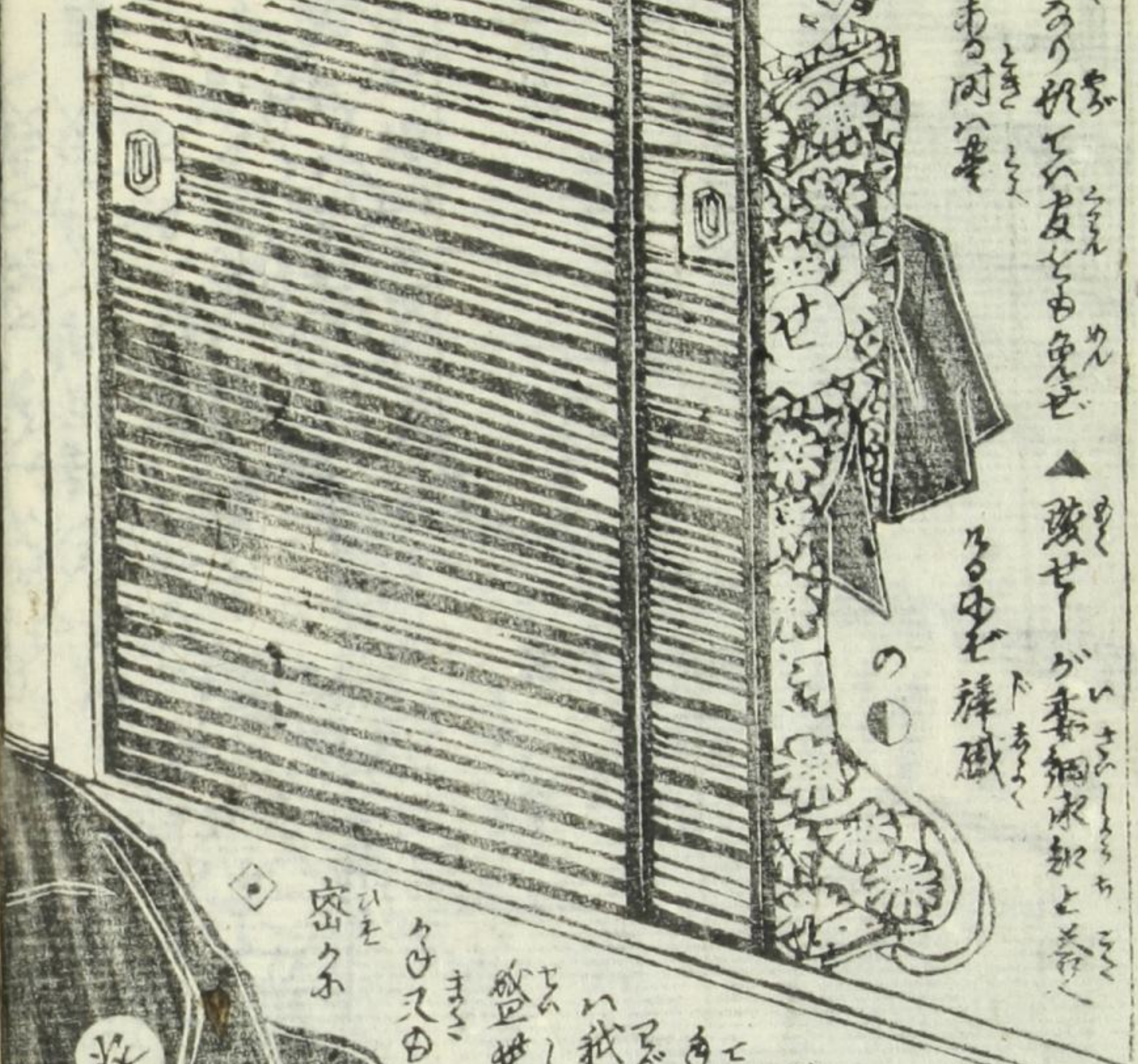


運子まど  
 小互ひの  
 ち打拵  
 ひ末の  
 末まご  
 約束は  
 守とるし  
 父のを  
 さう勝  
 らびを  
 ちて通  
 以内

七竿の  
 教  
 とさ  
 後地  
 教功の  
 白まの  
 人氏保  
 獲の威  
 小形を  
 身拵を  
 ちかか

ついでに... 室敷あり... 改せ... 乃中七祥威

の業... 辱... けり... 我... せ... 由... 人... 是... 庫...



せ... 用... 入... 我... 密... 家... 枝... 李... ぞ...

二... 乃... 不... 亦... 敬... 世... 得... 善...



の... 悔... 予... 妻... 入... 世... 家... 善...

成五...

の洋書

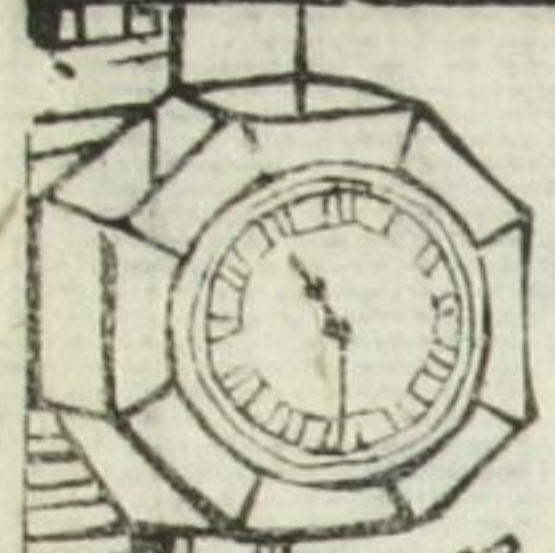
次へ

性急の者年より初め七か引くせありしに夫と云ふ  
 ねどいふの故地でもなる功業もむはく成りと云ふに  
 子てははたきけしき花奥屋不付  
 どの乃末へ如何あるると云  
 妻にられ教るもろくく暇り由  
 せよ妻もする心と感懐をともめて  
 父入今一智何れへ身とまふ  
 身成させてぬれと  
 親つ泪に  
 老懐由信が  
 ひとふい人と  
 ありあふ知る



是れをなす者  
 ときせとも  
 経由  
 ぬのり  
 妻よと余  
 あり白の教らる畢  
 妻はホガ  
 居る故ホ  
 こそや  
 孫と  
 持を  
 ても

人あつる小を専  
 業が心せぬにうい  
 元來徳よりいさうさぬ  
 専業故のりく教る  
 内務省の山林局十号  
 層と狩命の世にわは渡ハ  
 大のふをひてまが身荷由  
 遠らんとあふに遠ひてそ後と  
 初めの暇る由の席中へあうて  
 以上  
 是れを  
 仕やう  
 以上





〇〇〇  
 〇〇〇  
 〇〇〇  
 〇〇〇  
 〇〇〇  
 〇〇〇  
 〇〇〇  
 〇〇〇  
 〇〇〇  
 〇〇〇

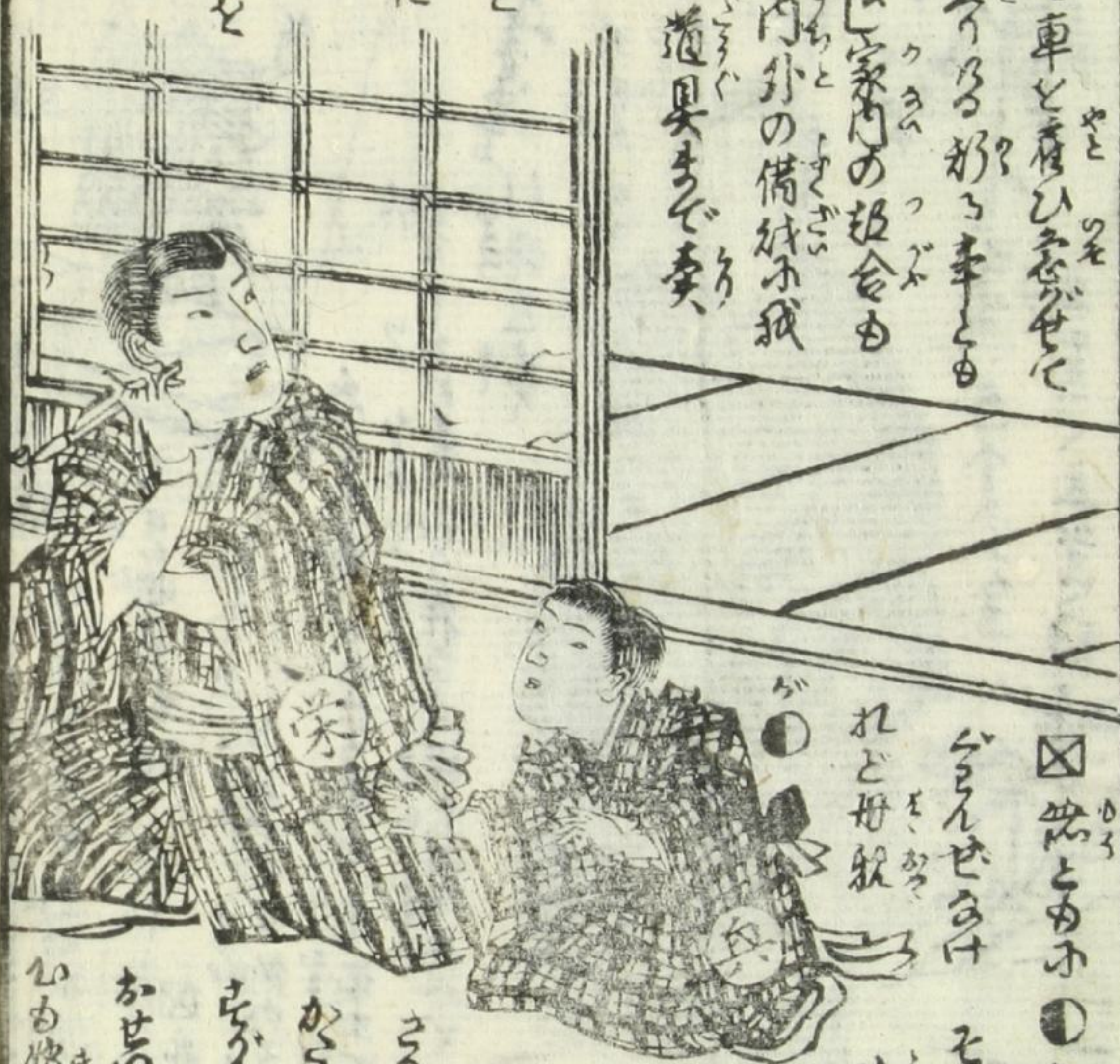
〇止らぬ老の一徹被おれつて因に  
 身兼美町へを接りたるおはるまが  
 不意持おけと細くもくさるり  
 二八の子信被其おまう場を結  
 たりしお事業約するもくわらで  
 盛込家が併に以二三日濃くお  
 番へつけおまご難やんぬ過ぎん隙  
 きて流る我家の門お渡りおとくる  
 ありゆきをそ家へ振込入置かお宅に  
 横子と指おけおや心おほひあう以上  
 再ゆゆけおせへが終ると敷くとあり  
 再ゆゆけおせへが終ると敷くとあり  
 再ゆゆけおせへが終ると敷くとあり



〇〇〇  
 〇〇〇  
 〇〇〇  
 〇〇〇  
 〇〇〇  
 〇〇〇  
 〇〇〇  
 〇〇〇  
 〇〇〇  
 〇〇〇

〇全おへん  
 〇全おへん  
 〇全おへん  
 〇全おへん  
 〇全おへん  
 〇全おへん  
 〇全おへん  
 〇全おへん  
 〇全おへん  
 〇全おへん

つぎ 左のつて車と宿ひをせ  
 者系へこそきりるがう事とも  
 重なる故曰ふは「家内の都合も  
 悪妻をまか内外の備付小我  
 月の夜状も道具まで委  
 て返し金あり  
 されど悪疾と  
 かへぬは身に  
 入用も苦む  
 備積の負債と  
 つむ便もろ  
 果の濃炭催

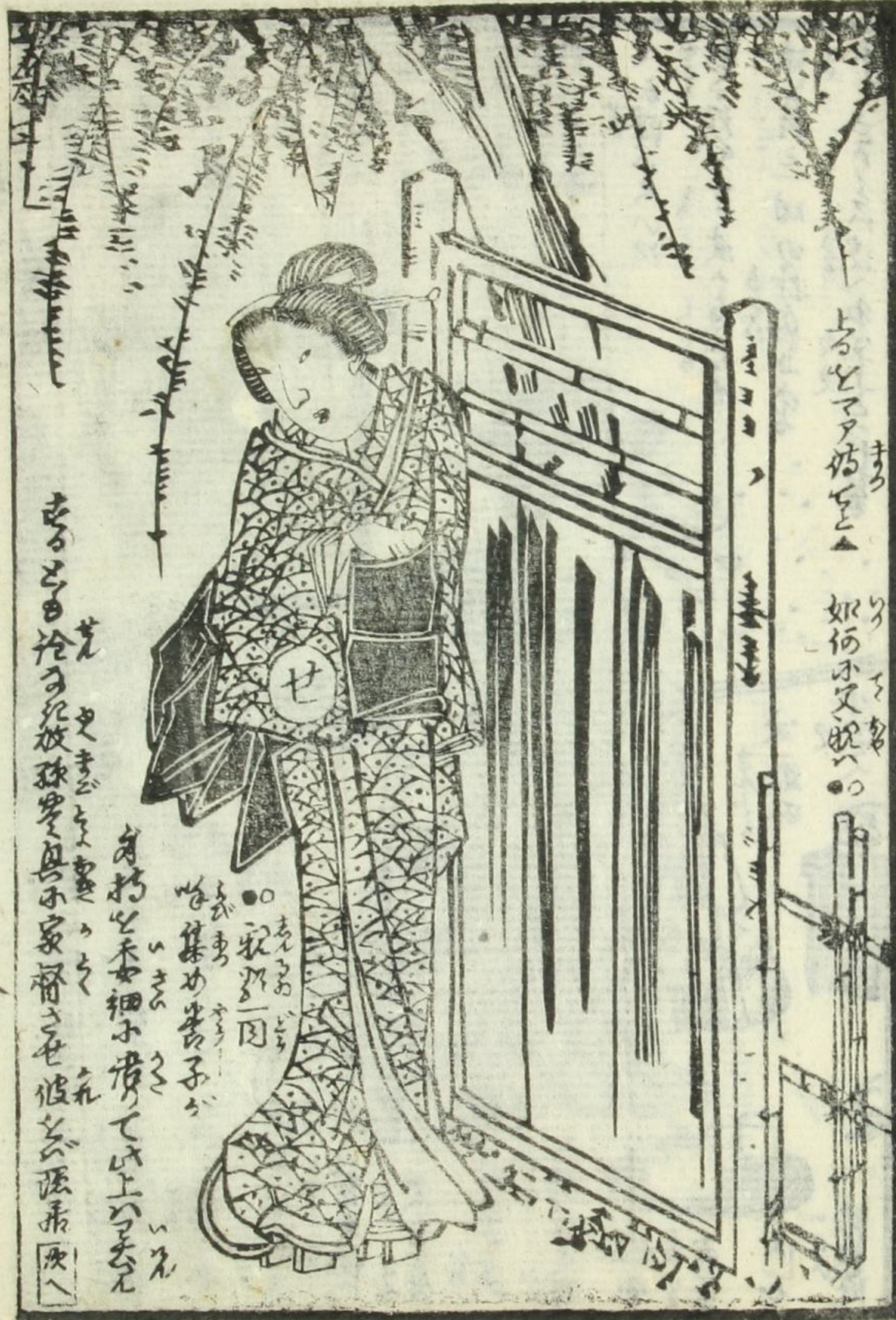


☒ 然と内小 怒きとさ  
 せんせまけ ことおひてや  
 れど母状 共小泪以を  
 多う父まを  
 何卒に世  
 くの内に  
 番てよといふ  
 さも思ふぬ家  
 かきとといふ  
 たりぬくあせ  
 おせの服もさ  
 公由勝えせま

怪ふか清も今  
 冷方るく 洞の外どまろり  
 都とも知らず 冬寒の例の  
 如くやろ 研みか焼炭を主  
 甚の流石の妻も揺り  
 久安慮ら  
 ぬを内お  
 宥へり共  
 道念立洞  
 るがはるき  
 日後へ二人の  
 子供を ☒



洞物小せるり飯令  
 けのわおひに  
 くるいぬまの  
 あるあせ  
 ふアレ  
 あの  
 通る  
 二人の  
 子供が  
 ひとふ  
 ひとふ  
 使とあむわさばいり  
 見固ふはぬれと 次へ

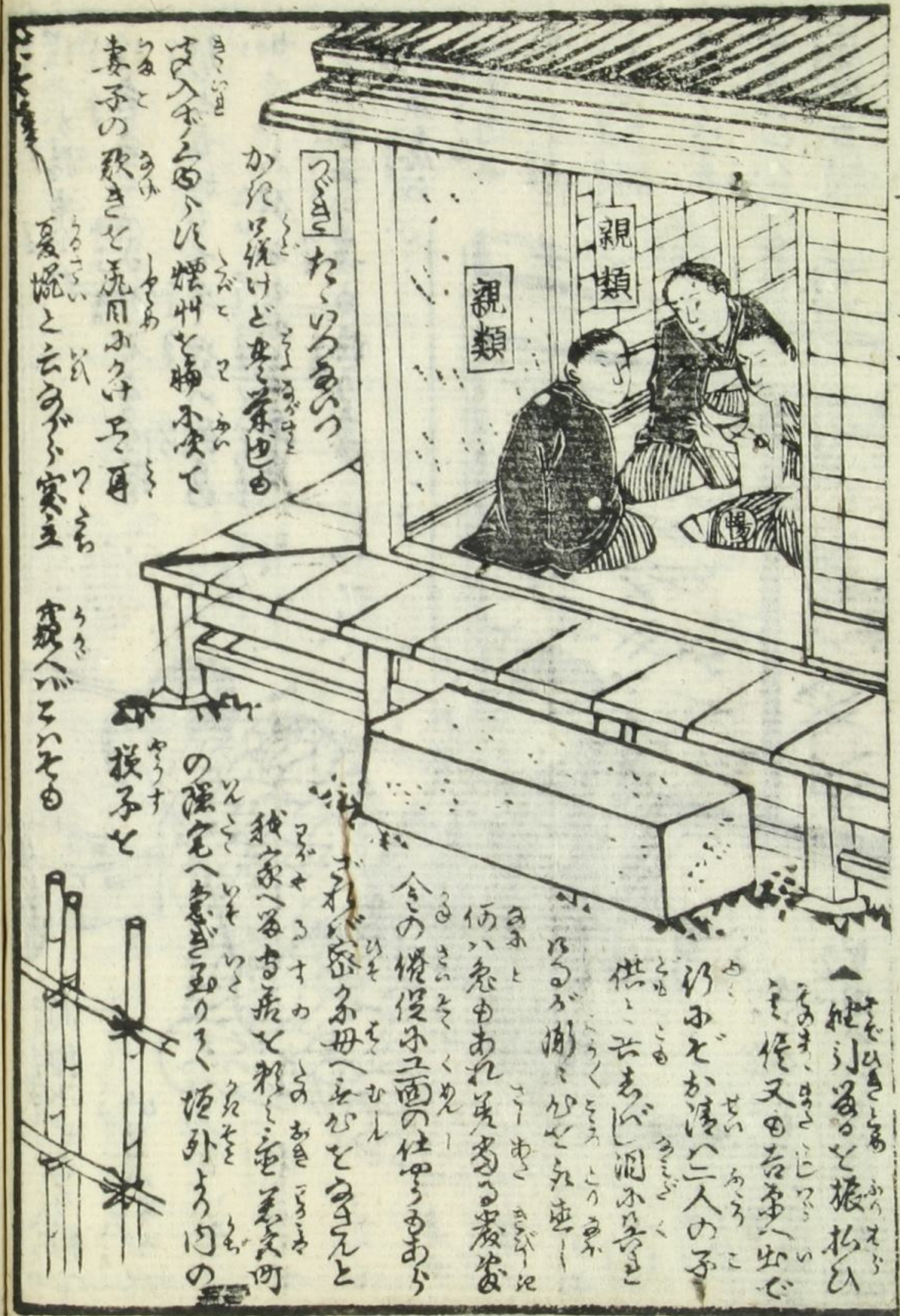


此の世に冷るは放疎を具の家督を世彼に譲る候へ  
 有持は木細小滑りて以上は  
 此の世に冷るは放疎を具の家督を世彼に譲る候へ

此の世に冷るは放疎を具の家督を世彼に譲る候へ  
 有持は木細小滑りて以上は

上方をアア姑と  
 如何に又脱への

如何に又脱への



加はは後けど女と茶也由  
 ば入平と百は煙州と橋不次て  
 妻子の歎きを流用ふけりて耳  
 夏焼と云ふが実主

夏焼と云ふが実主

換子と  
 の強名へ意ざりて垣外より内  
 換子と

此の世に冷るは放疎を具の家督を世彼に譲る候へ  
 有持は木細小滑りて以上は

此の世に冷るは放疎を具の家督を世彼に譲る候へ



つぎに  
 離縁と  
 せんとの  
 お渡小祝  
 紙小支取  
 の侍と種  
 てか清い大い  
 敷るはく有まゝの持由  
 申しれ三回の控由ある  
 おとさうのさばへ取父上とつれ

拍子間以起りに  
 養へて重相三日  
 拍破き後一七  
 花魚と△  
 けりつ  
 夫が居る形  
 つけと密う小  
 文と尋  
 ね申と夫  
 う訓謀の婿  
 妓小  
 依れ色  
 はしと



まて服をもせび父かぬうと  
 打ちき入りもされ心  
 せごとと枝の家へ入り  
 てあそほはい末まご身  
 持とば重して異の取扶へ  
 粧とも二人の子まを世  
 たる申の及よも離縁といひ  
 まのさばじやくと

あれを女の帳まど  
 甲斐に  
 真ひ  
 てまご踏由  
 兄ぬ者象へ  
 甲斐に  
 つく火へ



# 史彦作 國政画

御届 明治十四年 四月二十日  
浅草馬道下六丁目二番地  
編輯人 吉田嘉雄  
松島町一番地  
出版人 大西庄之助



つぎ互いお物の扱  
扱へ扱へおせい  
採り進ませる今日  
悠々まのい極楽  
あくやなまのい  
あむはとを名前の  
件と盛業のいよくもあつて  
妙道承お用するを云つて

とや  
をまひる  
あは  
はと  
は  
は

## 北廓花盛紫

三編 よき切

春亭史彦作  
梅堂國政画

## 今常盤布施譚

三編 よき切

松林伯圓綴  
梅堂國政画

## 雪月花三遊新話

三編 よき切

篠田仙果録  
梅堂國政画

## 書物問屋

東京日本橋區松島町壹番地  
松延堂大西 伊勢屋庄之助版

